

中国語を母語とする日本語学習者の「語り」の 冒頭部と終結部における表現的特徴 —日本語母語話者と比較して—

烏 日哲

要旨

本研究は中国語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者の、絵本の説明を行うときの「語り」に注目したものである。本研究では主に「語り」の冒頭部と終結部におけるそれぞれの言語的特徴と相違について探ってみた。その結果、中国語を母語とする日本語学習者は「語り」の冒頭部と終結部において話し手の感想やコメントを加える「評価」をよく用いていることがわかった。それに対して、日本語母語話者は絵本に描かれている事実を忠実に再現する傾向があることがわかった。

キーワード：中国語母語話者 日本語母語話者 語り 冒頭部 終結部

1 はじめに

本研究は、中国語を母語とする上級日本語学習者（CJ）と日本語母語話者（JJ）が絵本の説明を行なうときに現れる語り方の特徴を比較分析することによってそれぞれの「語り」の特徴を明らかにすることを目的としている。ここでいう「語り」とは「ある出来事を時間的・空間的連続体として、その流れに沿って再現したことばのまとまり」であると定義する。具体的には、字のない絵本を見せ、その内容を母語話者相手に話してもらった。ここでは、主に「語り」の冒頭部と終結部に焦点を当て、日本語学習者と母語話者がそれぞれ「何を」「どのように」語っているのかについて、情報と表現の観点からその言語的特徴を探ってみる。

2 先行研究と本研究の特徴

李（2000）は親しい友人同士の1対1の会話をデータに、「過去に発生した出来事の報告」を取り出し、これを「物語」と定義し分析している。李（2000）によれば、語り手が「物語」を開始するための言語行動として「話を変える表示をする」「話をするための許可をほかの会話参加者に求める」「話をしようとする意欲をほかの会話参加者にアピールする」「ほかの会話参加者の興味を引く」の4種類に分けて分析しているが、その中でも「ほかの会話参加者の興味を引く」という項目には以下の4種類の言語行動が挙げられている。

- 1 出来事の結末を先に言い出す
- 2 出来事発生当時の気持ちを表す
- 3 出来事から得た結論を提示する
- 4 物語の価値を主張する

また、「物語」を終了するための言語行動として以下の6種類が挙げられている。

- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1 出来事の結末をしめす | 2 出来事発生当時の気持ちを示す |
| 3 出来事・物語の終了を示す | 4 出来事の題目を示す |
| 5 出来事から得た結論を述べる | 6 出来事に対する感想・意見を述べる |

本研究の研究対象も李(2000)と同じく1対1の談話データではあるが、データの質から見て「会話」というよりも語り手と聞き手の役割が安定しており、「独話」に近いと認識している。その点からいえば、上記の「ほかの会話参加者の興味を引く」で挙げられた4種類の言語行動が本研究の目的である冒頭部における表現的特徴を探るのに示唆的である。また、本研究では文字のない絵本を語りの材料として用いたため、語られる内容が一定であり、より言語的な特徴がつかみやすいと予測される。

増田(2000)は日本語学習者と母語話者が書いたストーリーテリング文¹を比較し、文章の展開のテクニックの違いに注目している。結果として、母語話者はストーリーの全体的構造上の内容転換部分で「実は・・・たのだった」「結局・・・た」などの因果関係を表す形式を用いて「特定の言語表現の使用が見られた」としている。一方学習者はユニットの移行とユニットの内部の両方において接続助詞、接続詞に大きく依存していると結論付けている。増田(2000)がテキストの構造的枠組み内で、ストーリー展開の各ユニットの役割を果たすために、書き手がどのような言語表現を使用したのかについて観察したという点では本研究にとって示唆的である。しかし、テキストの質上ストーリーの構造を直接的に出来事の展開を支えている「方向づけ」「込み入った出来事」「結果、解決」という三つの枠組みで分析した点で本研究のストーリーの構造の分け方と異なる部分がある。

語りの終結部の言語的特徴について分析した先行研究には俵山(2007)がある。俵山(2007)は母語話者と非母語話者に4コマ漫画を説明させ、その終結部の言語的要素が用いられているのかについて分析している。日本語母語話者の語りには「なに使ったかと言えば」「ボクシングのために使ったんじゃなくて」というような談話の焦点を聞き手に伝達する注釈節と「買ったという落ちになっています」のような「という+ことがらを表す名詞」で終える特徴が見られたと報告されている。また、このような言語的な特徴は母語話者のほうがバラエティー豊かに用いられているのに対して、非母語話者にはほとんど用いられず、それが終結の意図や落ちの伝達の失敗につながっている可能性があるという指摘している。

俵山(2007)では、用いた談話データが語り手と聞き手の役割がほぼ固定されていて、より独話的という点で本研究と質的に似ており、母語話者の「という+ことがらを表す名詞」で談話を終了するという表現的特徴が本研究においても観察されるなど本研究にとっ

¹ 増田(2000)はすでに誰かによって書かれて(語られて)存在している「物語」や「昔話」などの語と区別するために、「ストーリーテリング文」という語を「ある出来事のプロセスを説明したひとまとまりの文章」と定義しているが、本研究ではいわゆる「語り」と同じものとみなす。

て示唆的ではあるが、非母語話者の言語的特徴についてあまり言及されなかったことや終結部におけるストーリーについての感想・意見を分析対象から除いた点において本研究の分析範囲と異なる。

3 研究の資料と方法

3.1 調査材料

調査に用いた絵本『アンジュール ある犬の物語』は、ベルギーの作家ガブリエル・パンサンの鉛筆デッサンによるものである。ある日、犬は飼い主に捨てられるが、飼い主を探しつづけ、最後にある少年と出会うという犬の一日が描いたものである。作品は全部で54枚の絵からなっており、文字による説明は行われていない。

具体的には次のような場面で構成されている。まず一匹の犬が飼い主と思われる何者かによって車の中から捨てられてしまう。捨てられた犬は道で飼い主を待ち続けるが、飼い主の姿は見えない。犬は飼い主を求めてさまよい始める。犬は道を渡ろうとして突然飛び出したため、それを避けようとした車と対向車線の車が衝突し、交通事故になってしまう。そして、犬は事故現場から離れ、野原や海辺のようなところでさまよい続ける。やがて町らしきにぎやかなところに着き、最後にある少年と出会うのである。

3.2 調査対象

本研究では、大学学部に在学する日本語学習者20名と日本語母語話者20名に調査を依頼した。学習者は、日本語のレベルを揃えるために、中国の大学で日本語を専攻している、日本語能力試験1級に合格した者に限定した。

3.3 調査の手続き

まず、調査協力者である話し手に絵本を20分程度読んでもらった。読み終わったら、その内容を聞き手に伝えるよう指示し、聞き手はまだ絵本を読んでいないことを伝えた。調査は話し手と聞き手が机を挟んで対面に位置し、1対1で行なった。その全過程を調査者が2台のビデオカメラで録画した。調査時間は1人当たり約30分である。

今回の調査の聞き手は話し手の全員と初対面となる日本語母語話者3名である。聞き手には調査が終了するまで絵本の内容を見せなかった。実際の調査においては、聞き手に話し手の発話を中断して質問をしてもよいが、できるだけ質問の箇所と回数を統一するよう指示した。実際の調査では聞き手からの質問がほとんど出なかったため、談話のデータは聞き手の違いによる干渉はなかったと思われる。

3.4 分析方法

まず、本研究でいう「冒頭部」と「終結部」の認定方法について説明する。

本研究において「どこまでを冒頭部・終結部と認定するのか」という問題が分析方法に大きく関わるため、ここでは談話の構成要素について説明することにする。

Labov (1972) によれば、物語は以下の6つの構成要素からなっている。

要旨・導入部：話の最初に、何についての話なのかを聞き手に伝える

「これはある犬の物語です」

「これから犬が飼い主に捨てられた話をします」

設定・方向付け：誰が、いつ、どこで、何を（していたか）

「ある日、犬は年を取ったため飼い主に連れられて」

「〇〇年の春、犬は飼い主一家とドライブに出かけた」

出来事：起きた事件は具体的に何なのか

「犬は途中で騒ぐので捨てられてしまった」

「犬が飼い主の車をずっと追っかけました」

評価：話し手の気持ちはどうだったのか、話の意味は何なのか

「この犬はかわいそうですね」

「飼い主が野良犬になってしまいました」

解決・結果：事件が最高潮を迎えた後、結局どうなったのか

「犬は自分の飼い主と再会できました」

「犬と女の子は幸せに暮らしました」

結語・終結部：話の最後の締めくくりのことば

「以上です」

「これで終わりです」

本研究は上記の先行研究を踏まえて、談話データの枠組みを機械的に絵本のシーンを基準に決めることにした。絵本の最初のページは犬が車から捨てられる場面である。データの中からこの場面について話していると思われる部分とそれ以前の語り手のすべての発話を「冒頭部」と認定し、語りの最初にどの要素が現れているのかについて考察する。すなわち、本研究における「冒頭部」には先行研究で言及された要旨・導入部、設定・方向付け、出来事、評価などが入りうると考えられる。一方、「終結部」を絵本の最後のシーンについて言及した内容が確認できるところから談話が終了するまでと限定する。絵本の最後のシーンは犬とある人が面と向かって立っている場面である。データの中からこの場面について話していると思われる部分とそれ以降の発話すべてを「終結部」と認定する。したがって、本研究における「終結部」には先行研究で言及された解決・結果、結語・終結部、評価などの要素が入りうると考えられる。これらの要素を本研究では構造の枠組みではなく、語り手が聞き手に提示する「情報」として扱う。また、本研究のデータの特徴はあるストーリーについて語った一定の長さがあるほぼ独話状態の会話資料である。口頭でストーリーを話しているため、挨拶の言葉や聞き手に対する始まりと終わりの予告も情報の

一つとして捉えることができる。したがって、本研究において、「冒頭部」で言及できる情報に「始まりのことば」「要旨・導入」「設定・方法付け」「出来事」「評価」などがあり、「終結部」で言及できる情報に「解決・結果」「結語・終結部」「評価」などがあると考えた。

具体的には、まず冒頭部と終結部で取り上げられている情報を構成要素ごとに選び出した。それぞれの項目に何人が言及していたかそれぞれ数字を出し、比較分析した。さらに具体的にどのような表現が使用されたのかについても分析する。

4 結果

4.1 冒頭部における比較

ここでは日本語学習者、日本語母語話者がそれぞれ冒頭部でどんな情報を提示したのかについて表で示す。

表 1 冒頭部における情報の言及

		CJ	JJ
開始のことば	挨拶、始まりの予告	3	0
要旨	何についての話しなのか	9	8
設定・方向付け	誰が、いつ、どこで、何を（していたか）	10	9
出来事	起きた事件は具体的に何なのか	20	20
評価	話し手の感想、コメント	6	0

表 1 について説明すると、まず冒頭部において開始のことばを用いたのは、学習者 3 名であり、母語話者には見られなかった。

例 1 今日はアンジュールという本、絵本を見ました。これについて簡単、紹介しましょう。(CJ20)

例 2 では、はじめさせていただきます。(CJ10)

例 3 じゃ始めます。(CJ14)

また、この話は何についての話なのか、要旨を提示したのがそれぞれ 9 名 (CJ) と 8 名 (JJ) である。次の例が要旨に当たる情報である。

例 4 昔、あるところに一匹の犬がいます。(CJ4)

例 5 えーと、ある犬がありました。(JJ4)

出来事の背景などの情報を提示したのが学習者 10 名、母語話者 9 名である。具体的次の例がそうである。

例 6 その野良犬がかい、あー、と、うんー、食べ物を探して自分の住んでいるところから、うんー道に出かけました。(CJ6)

例 7 最初の場面は広い草原の中に一本の道が通ってるシーンですけども、そこで車が走ってきます。(JJ8)

「出来事」については学習者も母語話者も全員言及しているが、本来冒頭部を限定する際に絵本の1ページ目を基準に切ったため当然の結果とも言える。

例8 ある日一匹の犬が飼い主に捨てられました。(CJ10)

例9 犬がえーと、えーと、車の中から捨てられて、捨てられました。(JJ14)

ただ、すべての被調査者が絵本の1ページ目を「犬が捨てられた」と解釈したわけではなく、個人差が存在し、まれに例10のように解釈した人もいた。

例10 この本なんですけれども、犬がいきなり車から追い出されます。(JJ16)

日本語学習者と母語話者の語りの冒頭部で一番差が出たのは「評価」である。学習者が冒頭部に話し手の感想或いはコメントを多用し、母語話者にはそうした特徴がほとんど見られなかった。

例11 そうですね。これはかなり悲しい物語だと思います。(CJ9)

例11のような発話は話し手が絵本を見てからの感想を聞き手にどんな話だったか要旨のようにまとめているため、本研究では「要旨」ではなく「評価」に分類した。

また、冒頭部では、母語話者と比較して今回の被調査者である中国語を母語とする上級日本語学習者の語りにおいて情報の欠如がないということが確認できた。

4.2 終結部における比較

ここでは日本語学習者、日本語母語話者がそれぞれ終結部でどんな情報を提示したのかについて表で示す。

表2 終結部における情報の言及

		CJ	JJ
解決・結果	結局どうなったのか	20	20
結語	話の最後の締めくくりのことば	16	11
評価	話し手の感想、コメント	8	1

表2のように、終結部において、学習者と母語話者は「評価」において最も大きな差が見られた。

例13 主はしんちゃんのところに歩いてきて、じっと見ていますが、最後にやはりしんちゃんは、うん、主に尻尾を振りながらあまい、甘えますよね。まあ、それ、そして、主もしんちゃんの帰りをなんか許したような感じです。このようなこの一、ストーリーの最後ですが、いい結末ですね。(CJ20)

「解決・結果」については学習者も母語話者も全員言及しているが、研究方法として終結部を限定する際に絵本の最後の場面を基準に切ったため当然の結果とも言える。

学習者の「結語」では、具体的に、ストーリーの実質的内容に関わりがなく、ただストーリーの終了を表す表現として一番多かったのが「以上です。」(5例)、「はい、以上です。」(4例)に続き、「このような物語だった。」「はい、以上です。終わりです。」「もう終わり

です。」「終わりました。」「終わります。」「はい。そういうストーリーです。」「以上です。すみません」がそれぞれ1例だった。

母語話者の語りの終結部において、「以上です。」「はい、以上です。」がそれぞれ2例あったほか、「はい。」「で、終わります。」「まあ、話としてはこれで終わりになります。」「お話は終わります。」「おしまいです。」「おわり。」「終わります」が1例あったという結果になった。

母語話者で結語がない者は9名と半数近くを占めるが、決して母語話者の語りには締めくくりの言葉が欠如しているというわけではない。母語話者が語りの終了時に「という＋ことがらを表す名詞」という形をもちいたため、単独で「結語」として出現せず、「解決・結果」としてカウントされたからと考えられる。これについて「5.2.2 母語話者の「終結部」における表現的特徴」で詳述する。

5 考察

5.1 「冒頭部」における表現的特徴

5.1.1 学習者の「冒頭部」における表現的特徴

学習者の「冒頭部」における表現には以下の特徴が見られた。

①ストーリー全体がどのような意味を持っているかについて自分なりに解釈する

学習者の語りには、CJ1、CJ5、CJ6のように「犬の復讐物語です」「かわいそうな犬の話かもしれない」「野良犬が飼い犬になった物語」と物語の解釈をまず提示しておくケースが見られた。その中でも、「～わたしがこう思っていますが」(CJ1)、「～かもしれないと思います。」(CJ5)のように、ストーリーの内容の把握が主観的である可能性を含意する発話や、「～そのこと、物語を話したいと思います。」(CJ6)のような「と思う」という形式を用いた発話特徴的である。

例 14 この絵本の中に書かれてたのはわたしがこう思ってますが、犬の復讐物語です。このような物語です。(CJ1)

例 15 ○○さん、うんー、これはうんー、かわいそうな犬の話かもしれないと思います。(CJ5)

例 16 今日は、あ、野良猫、野良犬、ごめんなさい、が、飼い犬になった、そのこと、物語を話した、たいと思います。(CJ6)

例 17 えーと、この話はえーと、捨てられる運命とその運命を破るために努力した犬の話です。(CJ16)

②ストーリーの伝え方についての説明を加える

以下の例では話し手がこれから犬の目線に立ってストーリーを進めていくということを予告した例である。実際この後話し手は「犬は～」ではなく「わたしは～」とストーリーを進めていくのである。

例 18 あの一、この映画わね、あの一アンジェールといううん一犬の物語です。うん一、あの一、この映画の主人公は、あの一、人というより、あの一、犬ですから、視点はあの一、犬の目から世界を見る、つまり犬のあの一、第一人称が犬と設定すれば、ストーリーがよりあの一、生き生きするという感じがあると思います。うん一、この犬はあの一、飼い主に捨てられた犬です。(CJ12)

③聞き手を意識した話し方をする

例 19 と例 20 はいずれも話し方がとてもユニークで、CJ13 は疑問文から始めて、CJ14 はこれから話すことを聞き手に予告することによって注意を引こうとしている。例 19 は自然な語り方とはいいいがたいが、疑問文という形式で語り始め、しかもその疑問文をもう一回繰り返すことによって導入が終わり出来事に入るといった語り方に注目してほしい。

例 19 これはいったいどんなストーリーですか？まずは皆さんもご存知のように、あ一去年ですか、え一と、日本でも使った、日本で使った映画の名前は犬の心ことですか、このような映画があります。そしてその中に、このストーリーとちょっと同じ、え一と、部分があります。それは犬が自分の主人を探すという物語です。では、この映画、絵本はどんなストーリーですか？(CJ13)

例 20 え一、犬は、あ、動物の中で、犬はその、一番忠誠心のある動物と言われていますが、え一、これから私が話したいその物語が、あの一、犬に関する物語です。じゃ始めます。(CJ14)

調査は話し手と聞き手一対一で行なわれた。例 19 では「皆さんもご存知のように」とあるが、おそらく日本語の授業でのスピーチの練習の成果ではないかと推測する。

④理由やいきさつなどについて付き加える

学習者はいきなり出来事のみを伝えるのが唐突に感じるからなのか、犬が捨てられた理由や捨てられる前までのいきさつなどについて詳しく説明し、前述したように何かした出来事を述べる前に背景などを提示しておく例が多かった。

例 21 え一と、ある犬が老いてきましたので、あの一、飼い主がこの犬が負担だと思って捨てたんです。うん一、いつも乗っていた車から、その犬を、と、うん一捨てたんです。(CJ18)

⑤犬に名前をつけて語りやすくする

このような冒頭部で犬に名前をつけて、以降ずっとその名前呼びつづける例が5名に見られた。犬の名前も絵本の名前の「アンジェール」が2名、そのほか絵本からヒントを得たと思われる「エンジェル」、日本でおなじみの「ハチ公」や、中国でも放送しているアニメのクレヨンしんちゃんの「しんちゃん」など日本文化に関連するものがあつた。

例 22 これから話すのは、ある、アンジェールという犬の物語です。アンジェールはその一、年をとったからご主人が捨てられて↑、その主人の一家は遠いところへ、砂漠かな↑私の想像ですけど(笑う) あ一、捨てられました。(CJ7)

次の例は話し手が理解した絵本の内容が正か否かについて不安であり、その心情をそのまま言葉にした例である。普段あまり絵本見ないから間違っている可能性があるとしてストーリーに全く関係ない話し手自身自身の状況を説明している。

例 23 では、はじめさせて頂きます。まず、言っておきたいのですが、この絵本はたぶん、私の理解がちょっと間違っているかもしれないです。ふだんはあまり絵本を見ないので、たぶんそれなりの理解力がないと思いますが、私の考えでは、はい。そうです。ある日一匹の犬が飼い主に捨てられました。(CJ10)

①～⑤からわかるように、学習者が聞き手にストーリーの内容を伝える際に、冒頭からさまざまな方法を駆使し、これから語ろうとするストーリーの内容について、全体像を把握させたり、予備知識を蓄えさせたりしようとしている様子が伺える。これはおそらく学習者が非母語である言語を使ってある程度まとまりのある話をする際に、その話が効率よく伝わるかどうか不安であるという一種の自信のなさの現れではないかと考えられる。また、逆にうまく伝わるかどうか自信がないからこそ絵本に描かれているストーリーの内容に加え、それ以外の情報も提示し、聞き手にできるだけ多くの情報の中から自分の必要な情報を汲み取って欲しいという「心的態度」の現れでもあると考えられる。

5.1.2 母語話者の「冒頭部」における表現的特徴

母語話者の「冒頭部」における表現には以下の特徴が見られた。

①出来事から語り始める

ストーリーの内容全体についての紹介や出来事が起きた場所、出来事が起きた背景などについての説明について触れたのが9名である。その中でも最初の場面である「犬が捨てられる」という出来事が発生する前の状況などについて触れたのが3名である。

例 24 犬がえーと、えーと、車の中から捨てられて、捨てられました。(JJ14)

例 25 今日はこの物語について話します。あるところに一匹の野良犬がいました。その野良犬は小さいごろからずっと野良犬で、あまり人とか、ほかの動物親とかに触れたことがなくて、なんか、よう、なんか捨てるというか、そんなところにいました。(JJ13)

②5W1Hを1発話で提示する傾向がある

物語のだれが、いつ、どこで、どうしたといった要素をたくさん含んでいる背景を一つの発話で提示する傾向がある。

例 26 何もない寂しいところで車から犬が捨てられてしまいます。(JJ5)

例 27 えーと、ある、一匹の犬が飼い主から車の中から捨てられてしまいました。(JJ6)

③背景の説明を控える

母語話者は出来事が起きた原因などの背景について触れるが比較的短い傾向がある。

例 28 この本の題名はアンジュールというもので、えーと、その内容についてなんですけど、まず、最初に、えー、元の飼い主家族の、家族に、えー、何か理由があったんだと思うんですけど、車からまあ、道路に捨てられて、この犬は捨てられてしまっていて、(JJ9)

④「まず」「最初に」などの表現を使用し、説明的である

これは日本語学習者と大きく違う表現的特徴でもある。

例 29 えーと、この話はまず最初に、犬があの一車で郊外のほうに連れてこられて、そこで捨てられてしまっていて、(JJ11)

例 30 ある日、まず、犬がどこか知らない遠くの場所に連れて行かれて、プツとある家族に捨てられてしまいました。(JJ12)

「まず」「最初」のような順番を伝える表現を用いることによって、ストーリーを聞いたことのない聞き手に話してあげるという課題をこなす上で確かにわかりやすい伝え方ではあるが、一方で説明的になりがちとも考えられる。

⑤「動詞+てしまう」を多用する

母語話者は出来事を語る際、絵本の1ページ目の犬が車から投げ捨てられるシーンを伝えるときに、「犬が捨てられてしまっていて」のような「動詞+てしまう」を使い、出来事の取り返しの付かない悲惨な状況であることを伝えようとする。この表現上の特徴が、物語の性格を直接自分の感想を述べることで聞き手に伝えようとする日本語学習者と大きく違っている点である。

例 31 えーと、ある、一匹の犬が飼い主から車の中から捨てられてしまいました。(JJ6)

5.2 「終結部」における表現的特徴

5.2.1 学習者の「終結部」における表現的特徴

①主人公の気持ちを描写する

学習者の語りでは、例 32 のように、話の最後に犬の心情を描写するケースが見られた。

例 32 この犬は最後にこのように思いました。たぶん、愛も憎しみも最初は人を思う気持ちから生まれるんだって、自分は本当に間違えたと思った。このような物語だった。(CJ1)

②ストーリーに対する気持ち・意見を表す

次の例 33、例 34 のように、ストーリーに対する自分の気持ちを述べたり、聞き手を意識し、絵本への感想を語るのも学習者の特徴的な語り方である。

例 33 この犬はまず人間に捨てられ、それから、人間だ、だまされ、自分をだましたのはあー、人間の中の、あー、純粋的な子供だというべきの子供です。うんー、あの一、悲しい物語ですね。もう終わりです。(CJ3)

例 34 えー、でも、私にとって、それは、その絵本は全然面白くないと思っています。
悲しいだけ、もし、自分に、えー、悲しいことに興味ない人は、その絵本は一
なに？見なくてもいいです。いいと思います。(CJ9)

③結末を表す表現を「～と思う」を用いる

母語話者と学習者が同じ結末を伝えている終結部ではあるが、学習者のほうは結末を
伝えたあとに「～と思う」表現を用いる例が 8 例と比較的多かった。

例 35 うんー、やっと、その犬とそのご主人と再会できました。あー、たぶんその一、
ほかの人かもしれません。たぶん新しい人かもしれませんが私の理解では、た
ぶん元ご主人のところにたどり着いたと思います。はい。以上です。終わりで
す。(CJ10)

例 36 私は、その最終は、うんー、ハチ公は本当の犯人を捜して、主人、あ、その人
を、その人を警察、警察官へ送って、主人の恩を返して、返したことになりま
したと思っています。(CJ19)

厳密に言えば、例 36 は決して自然な用例とは言えないが、「と思っています」を「と
思う」のつもりで使用していると考えてよいだろう。ここで「と思う」を用いた理由は、
学習者が自分の推測を強く聞き手に押し付けるのを避けたか、あるいは、日本語の授業
での練習の影響、母語の影響などが考えられる。

5.2.2 母語話者の「終結部」における表現的特徴

①事実を伝えて終わる特徴

母語話者は語りを終えるときにストーリーの性格にかかわる感想などは交えず、事実
だけを伝えて終わるケースが 11 例あった。

例 37 そしてついには、その家族の息子だった男の子に出会い、アンジュールは、えー
と、出会うことができました。おしまいです。(JJ4)

例 38 で、無事再会できて、終わりという物語です。(JJ7)

②「という」＋ことがらを表す名詞

母語話者は、語りの終結部において終了を表す表現として「・・・という話」のよう
な「という」を伴ったことがらを表す名詞が使用され、20 人中 9 人が観察された。

例 39 最後にその一、元の飼い主と、私としては元の飼い主かなと思う人が、その犬
を、元の道路に迎えに来て、その一、もちろん捨てた飼い主のほうもとても申
し訳なく思っていて、でも、犬もずいぶんつらいことがあったにもかかわらず、
その一、元の飼い主のところ、元のところに戻れてすごくうれしいという、
よかったなと思うっていうお話です。(JJ9)

例 40 えー、その子どもに対しては心を開いて、その一、やさしく接してもらったん
で、犬はその子に対して、うまくなっついてという話です。その犬はそのなっ

ついたというところで話が終わります。そんな、以上です。(JJ10)

例 41 それで、最初ニコニコしてたけど、じっとしてるから、「うん？ どうしたんだろう」っていう顔を子どもがして、で、結局、すごい、あの一、至近距離ができてから犬がうれしそうに尻尾を振って子供によって行った。というハッピーエンド（笑う）のお話です。(JJ11)

こうした表現を用いる効果について俵山（2007）は、話し手が今までのストーリーの内容は話し手自身が語ったものであることを強調し、聞き手をストーリーの中から現実へ取り戻すことができると指摘している。さらに「という」に後続する「話」などの名詞は、そこまでのストーリー全体を1つの名詞として概念化することで、それが「語り手」の手から離れ、1つのモノ・コトとして客体化されたものだと捉え、このストーリーの客体化は、語り手自身がストーリーから一定の距離をおき、もとの会話の場へ軸足を移しつつあることを示すものであると分析されている。

6 まとめと今後の課題

本研究では日本語学習者と日本語母語話者「語り」の冒頭部と終結部における表現的特徴について考察した。

その結果、開始部において日本語母語話者は、絵本の出来事以外の情報を加えずにそのまま語るのに対し、日本語学習者の語りは絵本の出来事以外の多様な情報を盛り込む傾向があることがわかった。出来事以外に、その出来事が起きる原因や理由、場面設定のような背景を語る傾向がある。また、絵本を見てからその内容を知らない聞き手に伝えるときに自分の感想やコメントをまず提示し、自分からみたストーリーの性格を聞き手に示そうとした特徴も見られた。これは李（2000）の会話の開始部で見られた聞き手の興味を引く「出来事の結末を先に言い出す」「出来事から得た結論を提示する」などの言語行動を駆使していたとも言える。

また、終結部においても、日本語母語話者が絵本の結末を絵本どおりに伝えるのに対して、日本語学習者の語りは絵本のストーリーに対する感想や内容に対する評価的なコメントなどを加えて話を終結していることがわかった。

では、どうしてこのような違いが生じたのか。考えられる可能性としては二つある。

堀川（1968）は「クリちゃん」という四コマ漫画を題材に学者、評論家、童話作家や小説家など異なる職業の人の作文を比較したところ、“書く人”の性格や学歴、職業、環境などが文体に深く関係を持つことを明らかにした。本研究においても、学習者と母語話者の国柄、文化的背景、今まで受けた作文教育などさまざまな影響で言語表現の方法に文化的差異が生じたのではないかという可能性が考えられる。

また、考察からわかるように、学習者の語りの冒頭部ではさまざまなストーリーの背景や設定を述べた上で絵本の内容に入っている。同様に終結部でも結末を述べ終わったにも

かかわらず、自分の理解や感想などを加えて更に説明しようとしている。こうした言語行動からは、学習者が自身の伝達能力に自信がなければいほど、たくさんの情報を提示して、その伝達能力の不足を補おうとする「心的態度」が伺えた。これも学習者と母語話者の違いを誘発した原因の一つと考えられる。果たしてそれが日本語学習者全体の特徴なのか、あるいは母語である中国語の影響なのかについては今後の課題にしたい。

参考文献

- 俵山雄司 (2007) 「語りの終結部の言語的特徴—日本語母語話者／非母語話者による 4 コマ漫画の内容を伝える語りから—」『日本語文法学会第 8 回大会発表予稿集』 PP.64-70
- 堀川直義 (1968) 「文体比較法の一つの試み」『文体論研究』 第 12 号 PP.10-17
- 増田真理子 (2000) 「日本語学習者と母語話者のストーリーテリング文を比較する—4 コマ漫画のストーリー内容を書いたテキストの分析から—」『多摩留学生センター教育研究論集第 2 号』 PP.13-25
- 李麗燕 (2000) 『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究 会話管理の観点から』 くろしお出版
- Labov, William (1972) *The Transformation of Experience in Narrative Syntax. Language in the Inner City*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press

(うりじゃ 言語社会研究科博士課程)